

「センス・オブ・ワンダー」の現代的意義

人と自然との関係性の視点から

東京農工大学大学院連合農学研究科博士課程 吉田 哲郎

『沈黙の春』で知られたレイチェル・カーソンには、結果的に彼女の遺作となった『センス・オブ・ワンダー』という、また別の意味でよく知られた著作がある。『センス・オブ・ワンダー』では、他の生命を含めた「自然」と出会ったときの驚きや喜び、すなわち「自然」と出会う感動が科学者と作家の目で描かれている。そこに込められた意義は、『沈黙の春』のようにいわゆる環境問題を直接的に糾弾することではなく、いわば「自然にふれる」ことの意義を静かに語ることによって、人と自然との関係性を浮かび上がらせようとしたことにあると思われる。このことは環境教育、とりわけ自然体験学習における人と自然との「応答的關係性」の認識と照応するものと考えられ、40年の歳月を経てもなお『センス・オブ・ワンダー』がわれわれに多くの示唆を与え続けている証左の一つであるように思われる。

ところで、われわれは「自然にふれる」と表現するとき、それは五感の一つとしての触覚を意味することを超えて、いわば統合的な身体感覚を意味していると思われる。中村雄二郎の『共通感覚論』によれば、それは人間の知覚が生物学的な次元のみで語りえるものではなく、歴史的なものでもあるからであり、そこに個々の感覚から共通感覚へといたる道筋が示されていると考えられるからである。このような中村の論考にしたがって、人間の感覚の歴史的な形成と変化とを考察することで「ふれる」ことの意味が明らかとなり、加えて現代における「ふれる」ことの意義もまた明らかになるように思われる。

一方で、人間と自然との関係性に着目して、社会問題や教育問題に多くの提言をおこなっている小原秀雄によれば、彼の「自己家畜化論」を踏まえた上で、動物や植物、あるいは様々な自然物を通しての野生との出会い、自然界での偶然とのめぐり合いなどが子どもたちにとって重要であるとい

う。そして、そのような偶然的な要素が絶えず入り込む具体的な場である「フィールド」で教育を実践していくことによって、人間（ヒト）的能力が形成されると論じている。また、森岡正博も『無痛文明論』の中で人と自然との出会いについて同様な捉え方をしているように思われ、それを「ハプニング」と表現している。

以上のように見たとき、「応答的關係性」、「フィールド」、「ハプニング」に共通する「自然」像とは主体的かつ偶然的な要素に満ちたものであり、より具体的には、そのような要件を満たす「場」であると考えられる。その一方で、「ふれる」ことを「共通感覚論」的に捉えなおしたとき、そのような「場」を体験することが「自然にふれる」ことである。そして、そのような偶然的な要素に満ちた「場」を体験することで「不思議さに驚嘆する感覚」を育てていくことこそが「センス・オブ・ワンダー」の意味するところであり、カーソンが『センス・オブ・ワンダー』で伝えようとした「センス・オブ・ワンダー」の現代的な意義であると思われる。